



あなたにぴったりの湿地は

みや じま めま
宮島沼



こんなところ ↓

宮島沼



牛山 克巳（宮島沼水鳥・湿地センター）



早朝見られるマガンの一斉飛び立ち
夕方にはねぐら入りの光景を楽しむことができる

みやじまぬま いしかり
宮島沼は、石狩川中流部に位置する水面積が25 ha ほどの小さな淡水湖である。毎年春と秋には数多くのガン、カモ、ハクチョウ類が飛来し、そのわた ちゅうけいち 渡りの中継地としての重要性から 2002 年 11 月 8 日にラムサール条約に登録された。渡りの時期には、最大 6 万羽を超えるマガン（→p.24）や数千羽のコハクチョウ（→p.26）が湖面を埋め、多くの人が見学に訪れる。

が見学に訪れる。

宮島沼周辺は道内有数の米どころとなっており、マガンやコハクチョウは収穫後の水田に残された落ち籾を食べて渡りのためのエネルギーを蓄える。マガンの渡りは片道 4,000 km にもなるが、宮島沼からカムチャツカ半島まではノンストップで移動するため、宮島沼周辺の水田で十分なエネルギーを補給することが特に重要となる。宮島沼が世界でも有数のマガンの飛来地となっている理由として、採食地となる広大な水田と、安心して休息できる沼がセットになって存在していることが大きいと考えられる。

給することが特に重要となる。宮島沼が世界でも有数のマガンの飛来地となっている理由として、採食地となる広大な水田と、安心して休息できる沼がセットになって存在していることが大きいと考えられる。



早春の宮島沼

沼が全面解氷する「沼開け」時にコハクチョウの飛来がピークを迎える
沼開けの平均日は4月11日



宮島沼の全景
手前に 2007 年に開設された宮島沼水鳥・湿地センターが見える
以前は大富会館という民間の施設があった

宮島沼の成因は公式には「不明」とされている。しかし、北から西側に石狩川が蛇行して流れており、北側には自然堤防が切れた痕跡が残されていることから、洪水の流れによって地面がえぐられてできた「押堀」ではないかと考えられる。宮島沼の名は、1891（明治 23）年に現在の新潟県三条市より入植した宮島佐次郎氏に由来する。宮島氏は、石狩川の左岸、宮島沼南端から樺戸道路の間の樹林湿地の開墾に着手し、樹木を伐採後、50 間（90 m）置きに排水溝を掘って農地を築き、1900（明治 33）年頃には足踏み水車で宮島沼の水を引いて稲作を試みたとされている。

開拓当初の宮島沼は、「周囲四里四方（12 万坪）と謂われ、形状はほぼ円形をなし、水はわき水で透明、当時は飲料水としても利用されていた」と記録されている。一般的に泥炭地の湖沼は腐植質の影響からモール泉同様に水が褐色を帯びるのに対し、宮島沼は石狩川の伏流水が湧き水として注ぎこんでおり、水は透明だったと考えられる。

しかし、大正時代に入ると水が褐色を帯び始め、昭和年代には湧き水がなくなり、現在ではアオコ*が大量発生するほど著しく富栄養化している。水面の縮小も進んでおり、1947 年には 33.6 ha あったと推定される水面も、2017 年には 23.8 ha になり、70 年間で面積は 7 割ほどになっている。また、1979 年には最大 2.4 m、平均 1.7 m あった水深も、2007 年には湖の中心で 55 cm となっており、浅底化も深刻である。

これらの課題に対応するため、地元美唄市は専門家や関連機関・団体による「宮島沼の水環境の保全と再生に関する検討会議」（2017～2018 年）を開催し、宮島沼に関わる全ての関係者の協働取り組みの指針として「宮島沼の保全と再生に関するマスタープラン（みやぶら）」を取りまとめた。2020 年からは 5 カ年の行動計画（みやぶらロードマップ）をもとに計画を進行しており、その成果が期待される。

* 富栄養化が進んだ沼や湖などで、植物プランクトン（おもにラン藻）が大発生した状態。水面に青緑色の粉をまいたように見える。

